

P-085

FSSGを用いた鳥肌胃炎の臨床像に関する検討

新井 修, 柴田憲邦, 久保木真, 池田 弘, 大元謙治
倉敷成人病センター肝臓病治療センター

【目的】鳥肌胃炎の症状、治療、内視鏡像の関係について定量的に検討した報告は少ない。そこで、FSSG(Frequency Scale for the Symptoms of GERD)を用いて、3者の関係を考察することを目的とした。【方法】2010年3月~2011年10月まで当院にて上部消化管内視鏡検査(GS)を実施し、鳥肌胃炎と診断した59例のうち、FSSGを使用して病状評価を行った17例を対象に年齢、性別、受診契機、ペプシノーゲン(PG)値、背景胃粘膜の萎縮程度、併存病変、*Helicobacter pylori*(HP)除菌率、除菌前後のFSSGの変化、内視鏡像とFSSGの関係を検討した。【結果】年齢は23-55歳(平均38.5歳)、男女比2:15、受診契機はPG異常10例(58.8%)、胃透視代替3例(17.6%)、胃透視異常と心窩部痛が2例(11.8%)ずつであった。PGIは31.3-87.5(平均55.5)、PGI/PGIIは1.88-4.76(平均2.7)で、陽性13例(陽性率76.5%)であった。内視鏡分類はgranularが8例(47%)、nodular3例(17.6%)、scattered9例(52.9%)であった。木村・竹本分類による萎縮の程度はC1:1例(5.9%)、C2:9例(52.9%)、C3:6例(35.3%)、O2:1例(5.9%)であった。併存病変はびらん性胃炎と十二指腸炎が3例ずつ、胃過形成性ポリープ1例であった。HP感染は17例全例陽性(感染率100%)で、除菌治療は16例に行われ、一次除菌成功10例、二次除菌成功2例、効果判定前3例、副作用で中止1例であった。FSSGは合計点数1-25(平均8.6点)、酸逆流関連症状0-12(平均3.9点)、運動不全症状0-13(平均4.7点)であった。HP除菌後にFSSG施行可能であった12例の除菌後FSSGは0-29(平均4.75点)で、症状改善例は8例(66.7%)、不変3例(25%)、悪化1例(8.3%)であった。FSSGと内視鏡像の関係はscattered4.2点、granular8.9点、nodular11.7点とFSSGが高値であるほど内視鏡像は高度となる傾向があった。【結論】HP除菌により消化器症状が改善する例が多かった。また、症状の強さと内視鏡像の程度は相関していた。

P-086

好酸球性胃腸炎の比較的軽症な2例

相澤茂幸, 山本浩治, 吉岡靖家, 加藤佐紀, 横井祐子, 大浦 元,

小島邦行, 餅 忠雄
服部記念病院内科

【はじめに】好酸球性胃腸炎は消化管に好酸球浸潤を来す比較的稀な疾患とされている。今回、好酸球性胃腸炎の比較的軽症の2例を経験した。これらの経験から好酸球性胃腸炎は軽症例も多く存在する可能性が窺われた。文献的考察を加え軽症2例について検討した。【症例1】28歳男性。主訴は腹痛。1ヶ月前から腹痛が出現。近医で腸炎として治療を受けるが改善せず、疼痛が増強し救急受診となる。血液検査所見の異常は好酸球の軽度上昇(10.3%)のみであった。腹部CTでは大腸の軽度の壁肥厚とダグラス窩にわずかな腹水を認めた。上部消化管内視鏡検査では十二指腸に軽度の発赤を認め、大腸内視鏡検査では回腸末端と大腸全域に軽度の発赤とびらんを散見した。病理検査で十二指腸、大腸および回腸末端に好酸球の中程度浸潤を認め、好酸球性胃腸炎と診断した。絶食で症状は改善したため退院するが、2週間後より症状が増悪しメサラジン投与を試みるも改善せず、3週間後に再入院となった。プレドニゾン30mgを開始したところ、症状は著明に改善し、現在も再発を認めていない。【症例2】15歳男児。主訴は心窩部痛。オリブオイルを摂取した翌日に嘔気、下痢が出現。近医で腸炎として治療を受けるが、心窩部痛が増悪し受診となる。血液検査所見の異常は好酸球の軽度上昇(15.3%)のみであった。腹部CTでは小腸の軽度の壁肥厚とダグラス窩にわずかな腹水を認めた。上部消化管内視鏡検査では十二指腸に軽度の発赤を認め、大腸内視鏡検査では特異的な所見は認めなかった。症状が強く、対症的にペントゾジンやシクロフェナック坐薬を頻回に使用しなければならなかった。病理検査で十二指腸に35/HPFの好酸球浸潤を認め、好酸球性胃腸炎と診断しステロイド投与を考慮したが、自然軽快の傾向を示したので抗ヒスタミン剤と抗アレルギー剤の投与を行った。その後、症状は完全に消失し、現在も再発は認めていない。アレルギー検査ではオリブの特異的IgEの上昇を認めた。

P-087

*H. pylori*非感染胃MALTリンパ腫の臨床像(染色体分析もふまえて)山崎琢士¹, 村田洋子², 有廣誠二³, 猿田雅之², 中野真純², 松岡美佳², 加藤智弘¹, 田尻久雄²¹東京慈恵会医科大学内視鏡科, ²東京慈恵会医科大学消化器・肝臓内科, ³ムラタクリニク

【背景・目的】胃MALTリンパ腫の多くが*H. pylori*(HP)感染に伴う慢性炎症を背景としたリンパ装置の腫瘍性増殖であり、除菌により60-80%が退縮する。一方でHP非感染症例ではそのほとんどが除菌に抵抗性である。近年の染色体分析により、除菌抵抗性症例に染色体異常が存在することが明らかとなっている。今後HP感染率が低下していく中で、胃MALTリンパ腫全体に占めるHP非感染症例が徐々に増えていくものと考えられ、その臨床像を把握することの意義が増す。【対象】2010年2月より今日までの間に、当院で経験したHP非感染胃MALTリンパ腫の内、染色体異常が陽性であった4症例を対象とし、それらの臨床像をまとめた。【結果・臨床像】年齢は47歳~73歳で、性差は1:1であった。内視鏡内眼所見(中村分類)では、混合型2例、表層型2例であったが、いずれもMALT病変の胃内多発傾向がみられ、特に微小病変については、非拡大の内視鏡では指摘し得ないがNBI併用拡大内視鏡で指摘し得た微小病変の存在が多数あった。EUSによる深達度診断では粘膜内病変が2例、粘膜下層浅層浸潤1例、固有筋層浸潤が1例であった。尚、微小病変のみを呈する症例では、生検による確定診断が困難と予想されたため、診断的ESDを行い確定診断に至った症例も存在した。染色体分析では、API2-MALT1染色体転座陽性が3例であり、他1例はトリソミー18を示唆するMALT1過剰コピー陽性であった。いずれの症例もHP非感染症例であり、除菌治療は無効であったため、放射線治療が施行された。【結論】染色体分析を施行したHP非感染胃MALTリンパ腫の臨床像を示した。深達度が浅い症例においては、胃内他部位に微小なMALT病変を随伴しており、非拡大内視鏡での検出が困難な微小病変が多数存在するため、治療方針決定の段階で拡大内視鏡による胃全体の詳細な観察が必要と考えられた。また診断的ESDも有用な診断手法と考えられた。

P-088

多発胃癌における既往歴・家族歴とマイクロサテライト不安定性

清水悠¹, 山下健太郎², 能正勝彦², 斉藤真由子², 鈴木 亮², 須河恭敬²,新沼 猛², 有村佳昭², 篠村恭久²

札幌医科大学第一内科

【目的】多発胃癌は単発例に比べマイクロサテライト不安定性(MSD)が高率であるといわれているが、なおその病態には不明な点が多い。Lynch症候群で発症率の高い癌の一つが胃癌であり、多発胃癌症例の中にLynch症候群が含まれる可能性がある。

【方法】多発胃癌症例の切除材料よりDNAを抽出し、蛍光プライマーを用いたPCR法でMSIを解析した。BAT-26およびBAT-25でスクリーニングし、いずれか陽性の場合3種類のマーカーで追加解析。2マーカー以上に差異がみられた病変をMSI陽性(MSI-H)とした。MSI-Hの場合はMLH1プロモーターのメチル化をreal time PCR法で検討した。

【成績】当科で診療した胃癌194症例のうち22症例(11.3%)が多発胃癌で、計46病変中87%が早期癌であった。平均年齢64.6歳(41~78)、女性5例(23%)、同時多発が17例、異時多発が5例で、同時三重癌1例、異時三重癌1例、他は全て二重癌であった。組織型は全て分化型が12例、全て未分化型が6例、分化/未分化型が4例で、女性の5例中4例は未分化型/未分化型の同時多発胃癌であった。他臓器癌の重複は直腸と上行結腸の多発大腸癌が1例、RAEBが1例、甲状腺癌が1例にみられた。家族歴として第一度近親者に胃癌を有する者が2例、大腸癌を有する者が2例含まれた。Amsterdam criteriaを満たした例はなく、1例がrevised Bethesda criteriaを満たした。現在までに16例26病変のMSI解析を行い、4症例(25%)5病変(19%)がMSI-Hであった。1例(症例1:65歳男性。大腸癌の家族歴あり)は2病変ともMSI-HであったがMLH1のメチル化が2病変とも陽性であった。残りの3例は1病変のみMSI-Hで、この中にBethesda criteria該当症例が含まれた。4例全て同時多発胃癌で、MSI-Hの5病変は全て隆起型の分化型粘膜内癌であった。

【結論】分化型多発胃癌においてはMSIが高率にみられたが、MSIは1病変のみ陽性の例が多く、Lynch症候群が強く疑われる症例は含まれなかった。